



有床診療所が無くなりそうだ！

皆さんは当院が有床診療所であることをご存知でしょうか？

有床診療所とは入院患者数が19人以下の医療機関をさします。この有床診療所という制度は日本独自の制度で、戦後の入院施設のたりなかった頃より現在まで地域医療の少なからぬ部分を担ってきました。

地域に密着した一人の医師が、普段はかかりつけ医として患者さんの通院治療を行い、必要に応じて入院医療を行っています。

当院は医師3人、看護師18人と人員配置は基準を大幅に上回り、病院の配置基準と同様です。診療実績も3月に発行された週刊朝日臨時増刊号「手術数でわかる いい病院 全国ランキング」の整形外科部門に茨城県では唯一ランキング入りしたように病院と遜色ないものと自負しております。ひたちなか市には病院以上に白内障手術を行っている眼科や先端医療を行っている産婦人科また医療と介護の必要な患者さんを入院させて治療している有床診療所など地域医療に大きく貢献している多くの有床診療所があります。しかし、入院基本料（診療報酬）では病院に比較すると、有床診療所の最高でも、人員配置基準の最も低いランクの病院よりも一日あたり5千円も安くされています。多くの医療機関はさらに医療の質を高めるべくスタッフの増員を計っていますがなかなか思うようにいかないことが現実です。

全国の有床診療所は毎年800施設ほど減少しています。茨城県でも入院施設のない無床診療所になる有床診療所が多くなっています。

茨城県の病院の病床数は全国で下から数えて9番目、一般診療所数はビリから3番目、医師数はビリから2番目、看護師数はビリから3番目と医療の過疎地と言ってもおかしくないのが現状です。このような状態で有床診療所が無くなれば困るのは患者さんであることは火をみるより明らかなです。

例として産婦人科の問題を考えたいと思います。産婦人科医が少ないことはよくご存知のことと思います。茨城県においては出産の約半分近くが産婦人科の有床診療所で行われています。実際、水戸線沿線には産婦人科のいる病院が無くなり看護学生が実習する施設が無くて困っている状態です。厚生労働省は有床診療所を消滅させようと社会保障審議会において不適切な資料を配布してるようですが、もし有床診療所が規制されて無くなればお産はどこですればいいのでしょうか。

私は有床診療所は地方においては患者さんにとって利便性のあるシステムであると思っています。病院の入院日数を減らすことが至上命題になっている今日、病院には入院できず、在宅では看護が困難という患者さんの行く場所が無くなってしまいます。有床診療所を無くしてはいけません。なにとぞご理解、ご支援をお願いします。

院長 小松 満

『前十字靱帯が切れてしまったら！』（前編）

前十字靱帯を断裂すると、まず膝に痛みと断裂部分からの出血の影響による腫れが生じ、特に膝の動き（曲げ伸ばし）が痛みで制限されます。この時期はまず、痛みと腫れを軽減させることが大事で、冷却（氷、シップ）と固定（包帯など）が重要です。2～3日過ぎると、徐々に痛み・腫れは軽くなってきて、膝の動きの範囲が拡大してきます。

約3週間ではほぼ痛み、腫れがなくなり、膝の動きも正座までいかにしてもかなり回復が見られ、日常生活動作においての不自由さはなくなります。

少なくとも、この時点までにはレントゲン写真だけではなく、必ずMRI検査を受けていただいて、靱帯、半月板、関節軟骨の状態に関して、確実な診断をつける必要があります。

ここで残念ながら、前十字靱帯断裂という診断が確定してしまったら、ここからどうするかは、実はケガをした患者さん自身が選ぶことになります。

何故かという、前にも書きましたように時間経過とともに日常生活動作においての不自由さはなくなりますので、こんな痛くも痒くもないのに、このまますぐバスケットボールに復帰してはだめなの？ とか まさか手術なんか必要ないよね！ と感じます。

実は本当に走れるし、飛んだり跳ねたりもできることはできます。

私も何人か、どうしてもすぐにでも大事な試合に出たい、中学3年の最後の試合でプレーしたいと涙ながらに訴える子に対して、何とかサポーターやテーピング程度の固定で出場を許可したこともあります。その結果はケガ以前の100%のパフォーマンスではプレーできなくても、何とかプレーできたことで、本人は一まず満足しているようです。しかし、試合に向けての練習の段階で膝がガクッとなり、転倒することがあったり、そのため膝のクッションになっている半月板に傷がついて、膝の引っかかり感や痛みと腫れを生ずる場合も少なくありません。こういう場合は今後のスポーツ活動を考えて、早期に手術を薦めています。

このように日常生活動作よりも 競技レベルのスポーツ活動、スポーツに限らない肉体労働、膝に捻り動作を必要とする職業などに関与している場合は特に手術治療が必要となります。

ここで競技レベルと一口に言っても、中学、高校の部活動が、ママさんバレーよりもハードかという点必ずしもそういうわけではないと思います。関節の弛緩性（柔軟性）、運動強度、膝にかかる体重負荷などを考えるとママさんバレーの方が膝にはハードとも言えます。

したがって、競技レベル、選手の意欲、年齢の問題など十分に考慮して、今後そのスポーツを続けていく上で、今の膝の状態ですべていけるかどうかという点を医師、患者さんとの話し合いで納得してから治療を選択していくべきです。

では手術をしないと決めた人はどうすれば良いのでしょうか？先に述べましたように、日常生活は特に問題なく、競技レベルの運動でなければ、不安定感を感じる人は少ないと思います。半月板や関節軟骨の損傷を伴ってなければ、今後の人生で大きな膝のトラブルになることはないと思います。

手術治療を選んだ場合、術後の競技復帰、重労働復帰までは、最低約6ヶ月間は必要です。新しく作られた靱帯（再建靱帯）の成熟度、手術した膝周囲の筋力の回復程度が問題で6ヶ月間を要します。特に靱帯の成熟度に関しては再建靱帯が術後2～3ヶ月の時期にやや弱化することが、実験的にも証明されており、いくら早く復帰したいとしても、この時期は競技復帰は不可能と考えます。

以上、前十字靱帯断裂後の経過を私の考えを中心に述べさせていただきましたが、次回最近のアメリカ整形外科スポーツ医学会が患者さん対象に作成した前十字靱帯損傷のパンフレットの内容を紹介します。



医師 星 忠行

混合診療の悲惨な中身

どうする日本の医療 

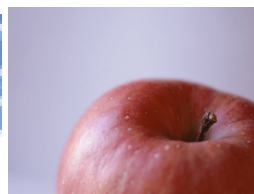
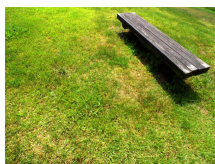
混合診療の禁止というのは、「保険診療と自由診療の混合を認めない」という日本の医療保険制度のルールである。

オリックスグループの最高経営責任者（CEO）であり、規制改革・民間開放推進会議の議長を務めている宮内義彦氏は、混合診療が目指す姿を、「国民がもっとさまざまな医療を受けなければ、『健康保険はここまでですよ』、後は『自分でお払ってください』というかたちです。金持ち優遇だと批判されますが、金持ちでなくとも、高度医療を受けなければ、家売ってでも受けるという選択をする人もいるでしょう」（週刊東洋経済2002年1月26日号）と説明している。これが、彼らの「選択」という言葉の中身なのである。私たち普通の医師には、「家売れ」という台詞は口が裂けてもいえない。

『市場原理と医療 米国の失敗から学ぶ』

李啓充（医師／作家〔前ハーバード大学医学部助教授〕）





看護師の耳寄りな話 

熱中症と熱射病

夏本番を迎える時期になりました。毎年、この時期TVでよく耳にするのは、熱中症という言葉。熱中症とは、暑熱環境で発症する障害の総称で、熱射病もこのうちのひとつとして含まれます。熱射病は、熱中症の程度でいうと、死亡する確率が高く、一刻も早く集中治療のできる病院へ運ぶ必要があります。

原因：体温の上昇によって中枢機能に異常をきたす

症状：意識障害

- ・ 名前を呼んでも返事がない
- ・ 話をしてもろれつが回らない
- ・ 意識がない

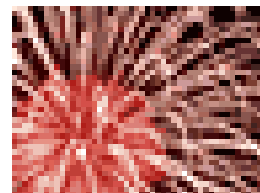
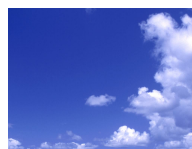
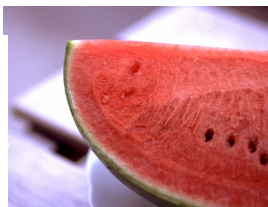
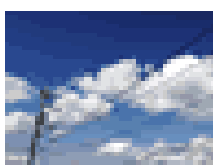


対処法：いかに早く体温を下げて意識を回復させるかが予後を左右！！

- ・ 水をかけたり濡れタオルを当てて扇ぐ
- ・ 頸、脇の下、足のつけ根など太い血管のある部分に氷やアイスパックをあてる。冷えた缶ジュース、ペットボトルでも代用OK。

熱中症は子供やスポーツ中の学生などに多くみられますが、高齢者も例外ではありません。こまめな水分補給を心がけて、元気にこの夏を乗り切りましょう。

看護師 高野 美由紀



「『けし』 じゃないの?！」



ゴールデンウィークの初日の朝、雨戸を開けていると、近所のおじさんが、ぬれ縁にどんと腰をおろし、私に話しかけてきました。

「最近、ケシの花があちこちに咲いているけど、いいのけ?わかんねえけ?」と。

．．．確かに薄いオレンジ色の花を見かけます。

なぜ、このおじさんはこんなことを言い出したのでしょうか?ケシには、観賞用と麻薬の原料となるものがあります。ケシから生あへんが採取されて、麻薬である強力な痛み止めになるモルヒネや咳止めとして使われるコデインになります。そしてモルヒネからは、ヘロインが作られます。ヘロインは戦前は、強力な咳止めとして使われていましたが、昭和20年にその使用が禁止されています。ヘロインは、乱用薬物の頂点に位置する物質で、最初は意味もなく幸せな気分を味わえますが、度を過ぎるとひどい禁断症状が出て、死へも至ります。麻薬になるケシは家庭での栽培は禁止されています。町中にも咲いていることがたまにあり、保健所で取り締まりをしています。幸いにも、近所に咲いていたのは、観賞用のケシの花でした。

昔、アグネスチャンが“ひなげしの花”を歌っていたのを何気なく聞いていたことや一緒になって歌っていたことを思い出しました。もし、アグネスチャンが麻薬のケシで花占いをしているとしたら一大事だったでしょう。

さわや薬局 薬剤師 黒澤 由子